

# ネガティブ・ライフ・イベントと抑うつとの関連における ruminationの媒介効果

野口 理英子\*, 藤生 英行\*\*

(平成19年6月13日受付, 平成19年9月10日受理)

## The mediative effect of rumination on relationship between negative life event and depression

NOGUCHI Rieko\* , FUJIU Hideyuki\*\*

This study examined the mediative effect of rumination on between negative life event and depression in adolescence, classified rumination response into reflection response and brooding response. The undergraduate students and graduate students ( $N=795$ ) completed negative life event scale, ruminative response scale, and BDI-II. The result showed that, (1) As well as previous studies, female were more sensitive to interpersonal negative life event than male, (2) male engaged in reflection when they had interpersonal problem, whereas female engaged in only brooding, (3) brooding mediated between negative life event and depression in spite of gender. These findings may contribute to understand relationship between interpersonal negative life event and depression in female.

Key Words : rumination, negative life event, depression, gender

### I 問題

大うつ病の生涯有病率は約15%, 女性では25%にものぼり (Sadock, B. J. & Sadock, V. A., 2003)<sup>(16)</sup>, 他の精神疾患と併発して生じることも指摘されている (Essau, 2004)<sup>(3)</sup>。これまでに, ネガティブ・ライフ・イベント (以下, NLE と略す) が後の抑うつを予測することが一貫して示されている (e.g., Monroe & Hadjiyannakis, 2002)<sup>(9)</sup>。同様に, 対人関係上のトラブル, 病気, 仕事や学業上の失敗など, 日常のストレスに曝されることは, うつ病のリスクを高めることが指摘されている (Cohen & Park, 1992; Compas, 1987)<sup>(1)</sup>。

青年期は親からの独立に伴い, 仲間関係の交流が進展し, 将来の職業選択を迫られる。環境的にも内面的にも変化の著しい時期であると考えられる。青年を対象とした NLE の研究において, NLE への反応に性差があることが指摘されている。例えば, 女性は男性よりも対人関係上の NLE を経験しやすく (Wagner & Compas, 1990)<sup>(20)</sup>, 仲間関係や家族関係におけるストレスに対して, より脆弱であることが示されている (Greene & Larson, 1991)<sup>(5)</sup>。また, Rudolph & Hammen (1999)<sup>(15)</sup> は, 青年期の女性は対人関係上の葛藤に脆弱である一方, 青年期の男性は学業上のストレスに脆弱であることを指摘している。

しかし, NLE に曝されることによって抑うつ状態に陥ったとしても, その状態から短期間で抜け出すことができれば, 精神的健康面で問題はないと考えられる。どのような要因が抑うつ状態を長期化, 重症化させるのかを明らかにするために, 反応スタイル理論が注目されている。Nolen-Hoeksema (1991)<sup>(12)</sup> が提唱した反応スタイル理論 (Response Styles Theory) は, 抑うつ発症の要因ではなく, 抑うつが存在する状態での反応を取り上げ, 抑うつの持続, 重症化をもたらす要因について検討するものである。反応スタイルには, 主に rumination と distraction があるとされている。rumination とは, ‘自身の抑うつ状態やその原因・結末に対して繰り返される行動・思考’ と定義され, 例えば自分がどのように感じているのかを思索するために 1 人で過ごすといった行動がこれに該当する。一方の distraction は, ‘自分の気持ちから注意を逸らすための意図的な行動・思考’ と定義され, 例えば自分の気持ちから注意を逸らすために趣味に熱中するといった行動がこれに該当する。反応スタイル理論を扱った一連の研究によって, rumination は抑うつ症状を悪化させやすく, distraction はそれらの軽減に有効であることが一貫して示されている (伊藤・竹中・上里, 2002)<sup>(6)</sup>。また, rumination の性差に関して, Nolen-Hoeksema et al. (1999)<sup>(13)</sup> は, 成人1100名のサンプルを用いた調査で, 女性は男性

\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

\*\*兵庫教育大学 (Hyogo University of Teacher Education)

よりもruminationに従事する傾向があることを見出し、女性のrumination傾向の高さがうつ病発症の性差を説明する要因となりうることを指摘した。

rumination と NLE との関連に関して、Spasojevic & Alloy (2003)<sup>(17)</sup>は、ruminationが対人関係上のNLEにどのように影響を与えるかについて2年半に渡り縦断的な調査を行った。その結果、日常的にruminationに従事することは、低いソーシャルサポートや対人関係のストレスを高めるといった、対人関係上の問題を引き起こすことが示された。このように、ruminationは特に対人関係上のNLEと密接に関連していることが指摘されている。

ところで、これまでruminationの研究に多く用いられてきたRuminative Responses Scale (以下、RRSと略す：Nolen-Hoeksema, Larson, & Grayson, 1999)<sup>(13)</sup>の項目のいくつかは、抑うつ症状と重なるものがある。そのため、Treyner, Gonzalez, & Nolen-Hoeksema (2003)<sup>(19)</sup>は抑うつ症状と重なる項目を取り除き、残りの10項目からruminationの下位因子としてreflectionとbroodingの2つの下位因子を見出した。reflectionとは、‘自分がなぜ憂うつなのかを理解するために最近の出来事を分析する’や‘自分がなぜ憂うつなのかを理解するために自分のパーソナリティを分析する’などの項目を含む、抑うつ症状に対して認知的な問題解決を図る反応である。一方、broodingとは、‘なぜ私は他の人にならぬ問題を抱えているのだろうか’と考える’や‘なぜ私は物事をうまく処理していけないのだろうか’と考える’などの項目を含む、抑うつ症状に対して憂うつそうに熟考する反応のことである。broodingは抑うつと関連が高いのに対し、reflectionは抑うつを持続、悪化と関連がないことが、その後の研究においても指摘されている(野口・藤生, 2005; 野口・藤生, 2007; Treyner et al., 2003)<sup>(10, 11, 19)</sup>。これらの研究により、これまで反応スタイルに関する研究で見出されてきたruminationと抑うつとの関連は、rumination尺度自体が抑うつ症状を含んでいることによるものである可能性があること、ならびに抑うつ症状を含まないruminationもreflectionとbroodingに分けられることの2点をおさえて検討し直す必要があると考えられる。

本研究の目的は、NLEと抑うつとの間を媒介するruminationの効果について、ruminationをreflectionとbroodingに分類し検討することである。NLEとruminationに関するそれぞれの先行研究において性差が認められていることから、本研究においても男女別に検討する。第一に、性別によってストレスと感じやすいNLEの内容と、rumination傾向の性差を検討する。Rudolph & Hammen (1999)<sup>(15)</sup>が指摘しているように、女性は対人関係上のNLEを経験しやすく、男性は学業などの課題達成に関するNLEを経験しやすいことが予想される。ruminationに関して、Nolen-Hoeksema et al. (1999)<sup>(13)</sup>と同様、女性は

ruminationの下位分類の種類に関わらず、男性よりもrumination傾向が高いと予想される。第二に、NLEと抑うつにおけるruminationの媒介効果について検討する。仮説的な因果関係として、①broodingが抑うつに寄与するのに対して、reflectionは抑うつと関連がない、②女性において、対人関係上のNLEはbroodingを経由して抑うつを高める、③男性において、課題達成に関するNLEはbroodingを経由して抑うつを高める、以上を想定し検討する。

## II 方法

### 1. 実施時期：2005年10月～2006年3月

対象：A大学およびB大学の大学生、大学院生を対象とした。欠損値のあるデータなどを除き、分析の対象となったのは男性434名(平均21.57歳, 標準偏差4.78), 女性360名(平均21.88歳, 標準偏差4.72), 計795名(平均21.71歳, 標準偏差4.86)であった。

### 2. 質問紙：

1) NLEに関する質問紙 高比良(1998)<sup>(18)</sup>が作成した、対人・達成領域ライフイベント尺度(大学生用, 短縮版)を使用した。これは、あらかじめNLEを測定する項目を、対人領域と達成領域とに分類して作成された質問紙である。高比良(1998)<sup>(18)</sup>によって、抑うつ尺度との基準関連妥当性および信頼性が確かめられている。対人領域の項目には‘家族, 友人, 恋人などを傷つけてしまった’, ‘人から無視された’などの項目が含まれている(計15項目)。達成領域の項目には, ‘授業についていけなくなった’, ‘やらなければならない課題(レポートなど)がたくさんあった’などの項目が含まれている(計15項目)。岡安・嶋田・丹羽・森・矢富(1992)<sup>(14)</sup>にならぬ、それぞれの項目に対する経験頻度と、それを経験したときに感じた嫌悪度をたずねた。経験頻度については、過去3ヶ月間の間に‘どのくらい経験したか’を尋ねた。嫌悪度に関しては、本研究の目的に合わせるため、経験したNLEによって, ‘どのくらい憂うつな気分になったか’に文面を変更した。

2) ruminationに関する質問紙 RRSではreflectionとbroodingが各5項目であり、野口・藤生(2005)<sup>(10)</sup>では信頼性を高めることが今後の課題とされた。そのため、本研究では以下の手続きによってreflectionとbroodingの項目を追加した。まず、各定義(reflection: 抑うつ症状に対して認知的問題解決する反応, brooding: 抑うつ症状に対して憂うつそうに熟考する反応)を参考に、既存のそれぞれ5項目に新たに5項目ずつを追加し、各10項目とした(例, reflection: ‘自分がなぜ憂うつなのかを理解するために自分の考えていることを分析する’, ‘自分が憂うつに感じる原因を明らかにしようとする’; brooding: ‘自分の行動を批判的に考える’, ‘自分の失敗について繰り返

し考える’)。そして、新たに作成したrumination尺度の信頼性を検討するため、上記の20項目（reflection10項目、brooding10項目）を大学院生2名が個別に分類した結果、brooding項目として作成した‘自分のやり方の問題点について考える’が、reflection項目として分類され、一致率は $\kappa=0.89$ であった。そのため、‘自分のやり方のよくなかった点について考える’に変更した。

3) 抑うつ症状に関する質問紙 BDI-II日本語版（Beck Depression Inventory-Second Edition: 小嶋・古川, 2003）<sup>(7)</sup>を用いた。小嶋・古川（2003）<sup>(7)</sup>によって、日本人サンプルにおける十分な信頼性と妥当性が確認されている。21項目であり、4件法で回答を求めた。

### III 結果

#### 1. 各質問紙の尺度構成

##### 1) NLE 質問紙

##### a. NLE 嫌悪度：

##### (1) 基礎統計

各項目得点の平均値は、1.03～2.21の範囲にあり、標準偏差は、.886～1.13の範囲であった。

#### (2) 因子構造

主因子法による因子分析を行い、解釈を容易にするためにプロマックス回転を行った。初期解における固有値の減衰状況と、高比良（1998）<sup>(18)</sup>の尺度構成を考慮し、2因子構造を採用することが妥当であると判断した。引き続き、複数の因子に対する負荷量の差が小さい（.10未満）項目、因子負荷量が.30未満の項目を削除しつつ、同様の分析を繰り返した最終的な結果を表1に示した。第1因子は、‘家族、友人、恋人などと、けんか、口論をした’、‘家族、友人、恋人などを傷つけてしまった’などの項目を含む、対人領域に関連する項目からなり、‘NLE 対人’因子とした。第2因子は、‘無駄なことに時間を費やした’、‘課題の出来が、自分では納得のいかないものだった’などの項目を含む、課題達成領域に関連する項目からなり、‘NLE 課題’因子とした。

##### b. NLE 経験頻度：

##### (1) 基礎統計

各項目の平均値は、.30～1.67の範囲にあり、標準偏差は、.664～1.02の範囲であった。

NLE の経験頻度は偶然に左右されるものであるため、

表1 NLE 尺度（嫌悪度）の因子分析結果（プロマックス回転後）

	因子	
	対人	課題
<b>NLE対人</b>		
NLE19 親しい友人、または恋人(配偶者)が病気や怪我をした。	.892	-.137
NLE2 友人、恋人(配偶者)との関係がダメになった。	.805	-.095
NLE15 家族、または親しい親戚の誰かが、病気や怪我をした。	.758	-.052
NLE5 家族、友人、恋人などを傷つけてしまった。	.754	-.065
NLE20 家族、友人、恋人(配偶者)などと、けんか、口論をした。	.744	-.023
NLE12 家族との折り合いが悪い。	.679	.081
NLE30 家族、親戚内でのトラブルを耳にした(あるいはそれに巻き込まれた)。	.661	.071
NLE1 人から無視された。	.559	.144
NLE16 約束をやぶられた。	.488	.235
NLE7 人から誤解された。	.427	.289
<b>NLE課題</b>		
NLE24 進行中の仕事(勉強)と関係のないことに時間をとられた。	-.170	.763
NLE13 無駄なことに時間を費やした。	-.197	.683
NLE18 課題(レポート、発表など)の出来が、自分では納得のいかないものだった。	-.006	.679
NLE10 試験、レポートで悪い成績をとった。	.097	.610
NLE11 授業についていけなくなった。	.047	.601
NLE6 授業中、先生の質問にほとんど答えることができなかった。	.117	.557
NLE14 課題(レポートなど)が期日までに終わらなかった。	.151	.555
NLE27 趣味や習い事が思うように上達しなかった。	.033	.551
NLE17 興味のない授業を受けるようになった。	-.040	.503
NLE21 望んでいた仕事(アルバイト)につけなかった。	.195	.447
NLE3 自分の勉強、研究などがうまく進まなかった。	.221	.446
NLE29 仕事(アルバイト)が見つからなかった。	.222	.430
NLE8 現在所属している大学自体に不満を持った。	.081	.422
NLE26 やらなければならない課題(レポートなど)がたくさんあった。	.123	.404
固有値	7.81	7.54
寄与率	36.88	5.66
累積寄与率	36.88	42.53

表2 rumination 尺度の因子分析結果（バリマックス回転後）とα係数

	因子	
	Reflection	Brooding
reflection (α=.890)		
自分がなぜ憂うつなのかを理解するために自分の考えていることを分析する。	.780	.280
自分が憂うつに感じる原因を明らかにしようとする。	.764	.310
自分が憂うつに感じる理由について整理する。	.745	.274
自分がなぜ憂うつなのかを理解するために最近の出来事を分析する。	.684	.189
憂うつな気分になっただけを明らかにしようとする。	.674	.307
自分がなぜ憂うつなのかを理解するために自分のパーソナリティを分析する。	.671	.216
感じている気分を客観的に捉えようとする。	.545	.086
brooding (α=.843)		
「なぜ私は物事をうまく処理していないのだろう」と考える。	.165	.742
自分の失敗について繰り返し考える。	.175	.703
自分の行動を批判的に考える。	.148	.637
「自分はなぜいつもそのようなやり方で反応するのか」と考える。	.248	.590
もっとよい振る舞いができなかったのだろうかと思う。	.235	.571
「自分はこのことに値するようなことを何かしているのだろうか」と考える。	.228	.542
もっとうまく出来ればよかったと思いながら、最近の出来事について考える。	.233	.513
「なぜ私は他の人になんか問題を抱えているのだろうか」と考える。	.117	.502
不機嫌な気分、自分のしていることを考える。	.182	.423
固有値	3.77	3.55
寄与率	23.54	22.18
累積寄与率	23.54	45.72

表3 NLE, rumination の各下位尺度, およびBDI-II得点の性差 (t検定)

	NLE対人		NLE課題		reflection		brooding		BDI-II	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)
男性(N=434)	13.60	(12.01)	27.09	(18.49)	16.05	(5.42)	21.04	(5.98)	12.46	(8.70)
女性(N=360)	15.83	(10.45)	26.94	(14.80)	17.04	(5.58)	22.13	(5.77)	13.16	(8.86)
df	792		791.02		792		792		792	
t	2.76 **		.132 n.s.		2.53 *		2.59 *		1.12 n.s.	

\*\*p<.01, \*p<.05

表4 相関係数 (男性, N=434)

	reflection	brooding	NLE対人	NLE課題
BDI合計	.144**	.333**	.376**	.433**
reflection		.583**	.266**	.182**
brooding			.344**	.405**
NLE対人				.486**

\*\*p<.01, \*p<.05

表5 相関係数 (女性, N=360)

	reflection	brooding	NLE対人	NLE課題
BDI合計	.054 n.s.	.446**	.473**	.501**
reflection		.442**	.131 *	.127 *
brooding			.359**	.398**
NLE対人				.437**

\*\*p<.01, \*p<.05

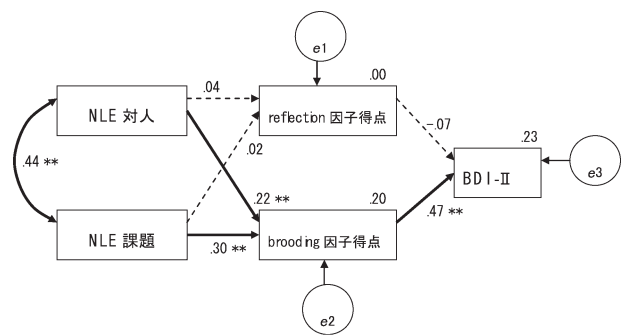
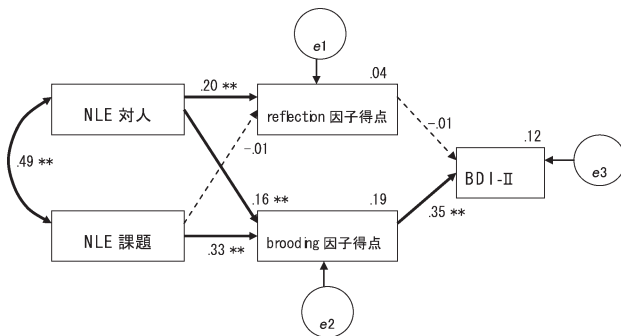


図1 NLE, rumination, 抑うつのパス解析結果 (男性)

図2 NLE, rumination, 抑うつのパス解析結果 (女性)

現実的に意味のある因子構造は想定できないと判断した。そのため、因子構造の検討は行わなかった。

### c. NLE 嫌悪度×経験頻度：

#### (1) 基礎統計

NLE によるストレスは、嫌悪度と経験度を掛け合わせることで得られるという岡安他 (1992)<sup>(4)</sup> の考え方になり、NLE に関する分析には、それぞれの項目に対する嫌悪度と経験頻度をかけ合わせたものを用いた。嫌悪度と経験頻度をかけ合わせた結果、各項目の平均値は、.43~3.67の範囲にあり、標準偏差は、1.29~2.89の範囲であった。

#### (2) 信頼性の検討

嫌悪度の因子構造をもとにして算出された NLE 対人の  $\alpha$  係数は.771, NLE 課題の  $\alpha$  係数は.809であった。各尺度得点の平均値はそれぞれ、14.61, 27.02であり、標準偏差はそれぞれ、11.38, 16.91であった。

先行研究になり、今後の分析には、NLE としてこれらの得点を用いることにする。

### 2) rumination 質問紙

#### (1) 基礎統計

各項目得点の平均値は、1.51~2.88の範囲にあり、標準偏差は、0.84~1.06の範囲であった。

#### (2) 尺度構成

rumination 尺度の信頼性を検討するために、rumination と brooding に相当する項目について、主因子法による因子分析を行ったところ、2 因子までで40.04% (固有値8.00) の説明率であった。この2 因子について解釈を容易にするためにバリマックス回転を行った。引き続き、因子負荷量が.30未満の項目を削除しつつ、同様の分析を繰り返した最終的な結果を表2に示した。第1 因子には reflection の項目の負荷量が高く、第2 因子には brooding の項目の負荷量が高く寄与していた。それぞれを 'reflection' 因子 (7 項目), 'brooding' 因子 (9 項目) とした。 $\alpha$  係数はそれぞれ、.890, .843であった。各尺度得点の平均値はそれぞれ、16.50, 21.53であり、標準偏差はそれぞれ、5.51, 5.90であった。

### 3) BDI-II

#### (1) 基礎統計

各項目の平均値は、.32~.96の範囲にあり、標準偏差は、.611~.876の範囲であった。日本語版 BDI-II 手引きによるうつ状態の程度の分類は、0~13点が466名、14~19点が164名、20~28点が125名、29~60点が40名であった。

#### (2) 信頼性分析

$\alpha$  係数は、.892であった。尺度得点の平均値は、12.78であり、標準偏差は、8.77であった。

### 2. NLE 尺度, rumination 尺度の各尺度得点における平均値の性差

NLE 尺度, rumination 尺度の各下位尺度得点に性差があ

るかを検討するため、性別による  $t$  検定を行った。その結果、NLE 対人得点, reflection 得点, brooding 得点の差が有意であった (それぞれ、 $t_{(792)}=2.76$ ,  $t_{(792)}=2.53$ ,  $t_{(792)}=2.59$ , 表3)。

### 3. NLE, rumination, および抑うつ症状の間の関連

男女別に、NLE, rumination の各下位尺度得点, BDI-II 得点の相関を示した (表4, 5)。男性において、NLE 対人得点, NLE 課題得点, reflection 得点, brooding 得点, BDI-II 得点それぞれの間に弱い~中程度の有意な正の相関が認められた。女性において、brooding 得点, NLE 対人得点, NLE 課題得点と BDI-II 得点との間に中程度の有意な正の相関が認められたのに対して、reflection 得点は BDI-II 得点と関連が認められなかった。brooding と NLE 対人得点, NLE 課題得点との間の相関関係に比べ、reflection と NLE 対人得点, NLE 課題得点との間の相関関係は弱かった。

次に NLE, rumination, 抑うつに関して仮説的に想定した因果関係を検討するために、男女別にパス解析を行った。NLE と BDI-II については、下位尺度得点を用い、rumination については多重共線性の問題を避けるために因子得点を用いた。パス係数は標準化偏回帰係数を用い、パスとパス係数を男女別に図1, 図2に示した (実線が有意であったパス)。その結果、男性の場合、NLE 対人から reflection 因子得点と brooding 因子得点にそれぞれ有意な正の影響を与えており、NLE 課題からは brooding 因子得点にのみ、有意な正の影響を与えていた。reflection 因子得点から BDI-II には有意な影響はなく、brooding 因子得点から BDI-II には有意な正の影響を与えていた。女性の場合、NLE 対人からは brooding 因子得点にのみ有意な正の影響を与え、reflection 因子得点には有意な影響を与えていなかった。NLE 課題からは brooding 因子得点にのみ、有意な正の影響を与えていた。reflection 因子得点から BDI-II には有意な影響はなく、brooding 因子得点から BDI-II に有意な正の影響を与えていた。NLE 対人および NLE 課題から brooding 因子を経由して BDI-II に与える影響について、男女別に brooding 因子の間接効果を算出した。NLE 対人から BDI-II への brooding 因子を経由した間接効果は、男性が0.06, 女性が0.10であった。NLE 課題から BDI-II への brooding 因子を経由した間接効果は、男性が0.12, 女性が0.14であった。

## IV 考察

### 1. ストレスと感じやすい NLE の内容, および rumination 傾向の性差に関する検討

NLE の内容について、対人関係上の NLE は女性が男性よりも高いストレスを感じていることが示された。したがって、Greene & Larson (1991)<sup>(5)</sup> が指摘しているように、女性は男性よりも日常的に仲間関係や家族関係の間

題に対して反応しやすいことが本研究でも確認された。一方、課題達成に関する NLE における性差は認められなかった。これは調査実施時期が各大学の試験期間に重なっていたことや、対象者の大半を占めた学部3年生にとっては、本格的な就職活動が始まる時期と重なっていたために、男女ともに試験や課題への意識が高まっていたことが影響している可能性がある。

rumination の下位分類について、reflection, brooding ともに女性が男性よりも有意に高かった。したがって、Nolen-Hoeksema et al.(1999)<sup>(15)</sup>同様、女性は男性よりも rumination に従事する傾向が高いという仮説は支持された。

## 2. NLE と抑うつにおける rumination の効果に関する検討

### 1) reflection, brooding が抑うつに与える影響

パス解析の結果、男女ともに reflection から抑うつに対して、有意な正の影響はないことが示された。一方、brooding は男女ともに抑うつに対して有意な正の影響を与えていることが示された。したがって、brooding が抑うつに寄与するのに対して、reflection は抑うつと関連がないという仮説①は支持された。野口・藤生 (2005, 2007)<sup>(10, 11)</sup>と同様、reflection は自分が憂うつになった原因やプロセスを分析し、問題解決の糸口をみつけることにつながるため、抑うつの長期化・重症化に発展しない可能性がある。一方、brooding は自身の抑うつ感情に浸り続け、状況を変化させるような注意の切り替えが困難になるために、抑うつを悪化させることが推察される。

### 2) NLE, rumination, 抑うつに関する検討

パス解析において、男女ともに対人関係上のストレスから brooding を媒介して、抑うつに正の影響を与えていることが示された。しかし、男性は対人関係上のストレスから reflection に正の影響が認められ、reflection から抑うつへの影響は認められなかった。したがって、男性は仲間や家族間での問題に直面しても、問題解決につながる reflection が生じた場合、抑うつ状態が悪化しない可能性が示唆された。一方、女性は対人関係上のストレスから reflection への正の影響は認められなかった。したがって、女性において、対人関係上の NLE は brooding を経由して抑うつを高めるという仮説②が支持された。*t* 検定の結果から、女性は男性よりも対人関係上の NLE にストレスを感じやすく、対人関係上の NLE と抑うつ症状の関連における brooding の間接効果は男性よりも高かった。この一連の流れが、女性の抑うつ症状を悪化させているのかもしれない。

男性は課題達成に関するストレスから brooding を経由し、抑うつに影響していることが示された。課題達成のストレスから reflection への影響は認められなかった。したがって、男性において、課題達成に関する NLE は brooding を経由して抑うつを高めるという仮説③が支持

された。

rumination は NLE と抑うつとの間の関連を媒介するコーピングとして捉えることができる。Compas, Connor, Osoviecki, & Welch (1997)<sup>(12)</sup>は、コーピングをストレス状況において意図的に行う統制型、自然に生じる自動化型に分類した。統制型－自動化型の分類の視点から rumination の下位分類を見直した場合、brooding から抜け出せない状態というのは、ストレスに対するコーピングが統制不可能な状態であり、自動化型コーピングに陥っている状態と考えられる。一方、reflection は自身の感情を理解しようとする統制型コーピングとして捉えることができる。女性は対人関係のストレスに対するコーピングとして、自動化型の brooding に従事し、男性は統制型の reflection に従事する傾向がある。Krajewski & Goffin (2005)<sup>(8)</sup>は、大学生を対象にストレスの内容によって従事するコーピングが異なるかどうかを検討した。その結果、女性は対人関係上の問題をより驚異的で統制困難と捉え、情動焦点型コーピングに従事する傾向が高いことが示された。一方、男性は対人関係上のストレスに対して、問題となる状況を統制可能と知覚するために、問題解決型コーピングに従事する傾向が高かった。以上のことから、女性は対人関係上のストレスに遭遇したとき、その状況を統制不可能と評価するだけでなく、brooding のような自動化型コーピングに従事し続けることで問題解決への糸口を見出せないという悪循環に陥る可能性が示唆される。

女性はグループからの排除、恋人や配偶者の死といった対人関係上のストレスに脆弱であり (Krajewski & Goffin, 2005)<sup>(8)</sup>、大うつ病の生涯有病率は 25% にもものぼる (Sadock, B. J. & Sadock, V. A., 2003)<sup>(16)</sup>。教育現場においても、女子は噂を流したり、仲間関係を操作したりして間接的に他者を攻撃するいじめの形態を持つことが指摘されている (藤生, 2001)<sup>(4)</sup>。本研究から、女性は対人関係上のストレスに対して、コーピングの統制が困難になり、適応的でない brooding に従事することを通して、抑うつを悪化させる可能性が示唆された。対人関係の問題を抱えた女性が、brooding から reflection や問題解決型コーピングに切りかえるメカニズムを明らかにすることが今後の研究の課題である。また、NLE の先行研究が青年期を対象としていたため (e.g., Wagner & Compas, 1990)<sup>(20)</sup>、本研究においても青年期を対象に調査を行った。しかし、うつ病はどの年代においても発症する可能性があるため (Sadock, B. J. & Sadock, V. A., 2003)<sup>(16)</sup>、今後の研究では他の年齢層における NLE や rumination の傾向を検討する必要がある。

## V 引用文献

(1) Cohen, L. H. & Park, C. Life stress in children and

- adolescents: An overview of conceptual and methodological issues. In La Greca, A. M., Siegel, L. J., Wallander, J. L., & Walker, C. E., (Eds.), *Stress and coping in child health*, Guilford, New York, pp.25-43, 1992
- (2) Compas, B. E., Connor, J., Osowiecki, D., & Welch, A. Effortful and involuntary response to stress: Implications for coping with chronic stress. In Gottlieb, B. H.(Ed.), *Coping with chronic stress*, Plenum, New York, pp.105-130, 1997
- (3) Essau, C. A. Primary prevention of depression. In Dozois, D. J. A. & Dobson, K. S., (Eds.), *The prevention of anxiety and depression*, American Psychological Association, Washington, pp.185-204, 2004
- (4) 藤生英行「いじめ (bullying) に関する諸外国の文献的研究 - 教師の基本知識としての知見のまとめ -」『上越教育大学心理教育相談研究』1, pp.139-159, 2001
- (5) Greene, A. L. & Larson, R. W. Variation in stress reactivity during adolescence. In Cummings, E. M., Greene, A. L., & Karraker, K. H., (Eds.), *Life-span developmental psychology: Perspectives on stress and coping*, Erlbaum, Hillsdale, pp.195-209, 1991
- (6) 伊藤拓・竹中晃二・上里一郎「反応スタイル理論 (Response Styles Theory) の研究動向と課題」『健康心理学研究』15, pp.39-51, 2002
- (7) 小嶋雅代・古川壽亮 (訳) 『日本語版 BDI-II』日本文化科学社 (Beck, A.T., Steer, R.A. & Brown, G. K. 1996 *Beck Depression Inventory-Second Edition*. The Psychological Corporation), 2003
- (8) Krajewski, H. T. & Goffin, R. D. Predicting occupational coping responses: The interactive effect of gender and work stresser context. *Journal of Occupational Health Psychology*, **10**, pp.44-53, 2005
- (9) Monroe, S. M. & Hadjiyannakis, K. The social environment and depression: Focusing on severe life stress. In Gotlib, I. H. & Hammen, C. L.(Ed.), *Handbook of depression*, The Guilfoed Press, New York, pp.314-340, 2002
- (10) 野口理英子・藤生英行「怒りの表出抑制と抑うつへの反応スタイルとの関連」『上越教育大学心理教育相談研究』4, pp.39-48, 2005
- (11) 野口理英子・藤生英行「抑うつと怒りの表出抑制が感情と心臓血管反応に与える影響 - 反応スタイル理論からの実験的検証 -」『健康心理学研究』20, pp.64-72, 2007
- (12) Nolen-Hoeksema, S. Responses to depression and their effects on the duration of depressive episodes. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, pp.569-582, 1991
- (13) Nolen-Hoeksema, S., Larson, J., & Grayson, C. Explaining the gender difference in depressive symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, pp.1061-1072, 1999
- (14) 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美「中学生の学校ストレスラーの評価とストレス反応との関係」『心理学研究』63, pp.310-318, 1992
- (15) Rudolph, K. D. & Hammen, C. Age and gender as determinants of stress exposure, generation, and reactions in youngsters: A transactional perspective. *Child Development*, **70**, pp.660-677, 1999
- (16) Sadock, B. J. & Sadock, V. A. Kaplan & Sadock's synopsis of psychiatry: Behavioral sciences/clinical psychiatry, 9th ed, Philadelphia, 2003 (サドック, B. J. & サドック, V. A., 井上令一・四宮滋子 (訳), カプラン臨床精神医学テキスト, 第2版, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2004)
- (17) Spasojevic, J., Alloy, L. B., Abramson, L. Y., Maccoon, D., & Robinson, M. S. Reactive rumination: Outcomes, mechanisms, and developmental antecedents. In Papageorgiou, C. & Wells, A., (Eds.), *Depressive rumination: Nature, theory, and treatment*, John Wiley & Sons, West Sussex, pp.43-58, 2003
- (18) 高比良美詠子「対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討」『社会心理学研究』14, pp.12-24, 1998
- (19) Treyner, W., Gonzalez, R., & Nolen-Hoeksema, S., Rumination Reconsidered: A psychometric analysis. *Cognitive Therapy and Research*, **27**, pp.247-259, 2003
- (20) Wagner, B. M. & Compas, B. E. Gender, instrumentality, and expressivity: moderators of the relation between stress and psychological symptoms during adolescence. *American Journal of Community Psychology*, **18**, pp.383-406, 1990